

2006. 10. 15 丸尾氏から



塩飽海運王・丸尾五左衛門の虚実

塩飽海運王・丸尾五左衛門の虚実

塩飽海賊の話

塩飽海運王・丸尾五左衛門の虚実

私のオヤジは欧州航路の船乗りだった。  
香川県香西の生まれで、私に似て背が低く、少し猫背で、髭の濃い、目玉の大きい男だった。  
甚だ気が短く癪癪もちで、すぐ腹を立てた。  
「この野郎っ」  
と、仕込杖を抜いて何度追っかけられたか知れない。仕込杖というのは、大正以後に姿を消したようだが、ステッキの中にギラギラする細身の日本刀が仕込んである。その白刃が閃くたびに、私は一目散に逃げ出したものである。そのオヤジが酔うと、

「オレは海賊の子孫だからな」

と、自慢した。海賊が自慢になるかどうかは知らないが、オヤジは海賊の子孫だから船乗りになつたらしい。オヤジが海賊の子孫だったら、その子の私も当然海賊の子孫ということになる。私が海賊に興味をもつたのは、このセイである。

ところが祖父の話によると、

「いまは香西に住んどうるが、もとは塩飽しよくの出身での……」  
と、いうことだった。

さては塩飽海賊の末裔だな——と、思った。塩飽七島は、本州の下津井から、四国の丸亀に至る瀬戸内海に、点々と連なる美しい七つの島々である。

言ってみれば、瀬戸内海が多島海となる東の入口で、まるで絵のような島々だが、瀬戸内海を航行する船は、嫌でもこの島々の間を通らねばならない。

それを待ち伏せして積み荷を強奪する海賊には、格好の島である。だから、藤原純友の昔から海賊の根拠地だった。

私も学生の頃、塩飽島に渡ってみたことがある。一番大きい島は本島ほんじまだが、その笠島浦から上陸してみると、舟隠しの入江や、物見の丘や、鳴瀬の暗礁があつて、全く海賊を働くにはすべての道具立てが揃っているのである。

ここに生まれて、海賊にならなかつたら、バカであると思つた。塩飽七島は海賊の島である。だが、いかに「南海治乱記」や「松梅論」や「師清伝」や、その他の海賊史をひもといても、丸尾海賊など、一人も見当らないのである。

### 童心に立ち返れば

ところが「讃岐の民話」(武田明氏著・未来社)に収録されている佐柳志々島普話集に、こんな民話のついでに、佐柳島は塩飽七島に近接した島で、かつては塩飽七島の一つに数えられたこともあつた。ちよつと童心に立ち返つて、この民話に耳を傾けて頂きたい。

むかし塩飽しよくの牛島に五左衛門という若者がおりました。

(注・牛島は塩飽七島の中で最も四国に近く、牛が臥したような姿をしているのでこの名がある)  
千石舟のかしきになつてやとわれていました。

かしきの役目は、舟の中のめしたきでありました。

舟の中では一番若い者がする役なので、船頭をはじめみんなから、

「五左衛門よ、五左衛門よ」

と言われ、なにかの用にもつかわれていました。その千石舟は讃岐から大阪まで通っている舟でした。ある年の大つごもりの晩であります。船頭が、

「みなの方、もう正月じゃきに年取りせにやいかんぞ」

と言つて、年取りの祝いをする事になりました。ちょうど舟は播磨灘を通過していたので、鹿ガ瀬のところまで来て、いかりをおろしました。

「さあ、年取りじゃ、お目出とう」

と言つて、みんな酒をのんで酔つて寝てしまいました。

五左衛門はかしきでしたから、食べたものの跡かたづけをしていました。

五左衛門がひよつと梶の口をあけて見ると、舟は瀬の上に坐つてしまつています。

「これはどうしたのじゃるか。けつたいなことになつとるわい」

と言いながら、よく見ると、瀬の砂がピカピカと光りかかっています……(中略)

そこで五左衛門は瀬におりてその砂を掬ってくるのだが、やがてみんな目を覚まして出帆の用意にかかったが、五左衛門は「舟は浅瀬にのつているから動くまい」と言つと、船頭たちは「バカなことを言うな。鹿ガ瀬は昔からどんなに汐がひいても舟が座礁することなどないのだ」と言つて、いかりをあげてみると、ちゃんと舟は浮いている。五左衛門は不思議でたまらない。「だ

つて、おれは鹿ガ瀬の砂を掬つて来たもの、さあ見てくれ」と、みんなに見せると、それは金の小判だった。「えらいものを拾つたな。おれたちにも分ける」ということになった。そこで……

五左衛門は年も若いし、かしきだったので、仕方なくみなの言いなりに分けてやりました。

みんなは、

「これだけありや、大阪でなんぼつこうてもええぞ」

と言つて、たいそう喜びました。袋に入れて大事にしまひこんでいました。

いよいよ舟が大阪に着いたので、中をあけて見ると、みんなのは砂になつてしまつています。

五左衛門のはあけて見ると、やっぱり小判ばかりでありました。

五左衛門はその金をもとでにして大分限者になりました。

これは「めでたしめでたし」と結ぶ一種の分限者物語だが、讃岐には、同じ五左衛門が、どうして大分限者になつたかについて、全く異つた民話が語りつがれている。同じく佐柳志々島昔話集で、武田明氏の収録である。

五左衛門は、若いときは、大阪へ行つて、あくた船をおしていました。

明日はもうお正月という日に、あくた船に乗つて大きい橋の下で一休みしていました。橋の上を通りかかった商人風の男が、

「船頭、一晩泊めてくれんか」

と言いました。五左衛門は、

「こななきまくい(汚い)とこでよかったら、さあさあ、遠慮なく泊まってつかされ」と言いました。男は船の中へ入って、ぐっすり眠ってしまいました。

夜明けごろになって、東の空がしらみかけると、その男は、

「五左衛門よ、五左衛門よ、わしはもう帰るぞ」

と言いました。そして、

「わしはの、何をかくそう熱病神じゃ。ゆうべは節分の豆を打たれてかなわぬけに、お前の船に泊めてもらった。何ぞ思をおくってやるぞ」と言って、見えなくなってしまう。

ある日、五左衛門の船に番頭風の人が「讃岐の牛島の五左衛門さんの船はこれですか」とたずねて来ました。そうだと答えると、手をついて、

「うちの旦那様が、熱が高うて困っています。うとうとしもって、牛島の五左衛門さんをお呼び申します。是非とも来てつかされ」

「わしや、なんちゃ出けんが、そないに言うんなら、いってあげらい」

と、番頭につれられてゆくと、ひろい立派な座敷に通されました。ところが旦那が寝ている枕もとに、この前に五左衛門の船に宿を借りに来た男が坐っていました。その姿は他の人には見えませんが、五左衛門にはよく見えます。その男は五左衛門に低い声で耳打ちして、

「お前が来たけに、わしはのいていぬぞ。お前はくれるだけ金をもるとけ」

と言って、熱の神の姿が見えなくなりました。五左衛門は旦那の足や腰をさすって、

「もう、これでなおりますけに」と言いました。

旦那は弱っていたのが急に元気になりました。そして、なおってしまいました。

そこで、五左衛門にたくさんのお金をくれました。それからはよいことがつづいて、五左衛門は分限者になりました。

どうやら落語のネタにも似通う民話だが、讃岐地方で今も語りつがれているこの二つの民話に共通の点は、

①五左衛門は塩飽の牛島生まれである。

②若い頃から舟乗りの下っ端だった。

③大阪通いの舟である。

④信じられないような事件で金持ちになる。

⑤だがその原因は、五左衛門が善行を積んだためでもなければ、利巧だったためでもなく、信心深かったためでもない。ただ漫然と金持ちになる幸運を掴むのである。

ここに他の民話と違った特徴がある。

五左衛門、五左衛門と子供には人気があるようだが、いったいこの五左衛門とは誰なのか？ 実

はもう一つ、五左衛門に関する民話が残っている。童心に返ってもう一つだけおつき合いを願いたい。これは反対に五左衛門が貧乏する話である。同書の「讃岐民俗稿本」をそのまま引用させてもらうことにする。

五左衛門の苗字(めようじ)は丸尾と言いました。大きい船持ちで、その船の数はなんそうあるか自分でも知りませんでした。

丸に矢の字をつけたしるしの帆をはった船が、どこの港でも見うけられました。

沖をはしるは 丸尾の船か 丸に矢の字の 帆が見える

と、唄にまでうたわれました。

五左衛門は大分限者になったので、長者鑑にまでその名前はのせられました。

長者鑑にのると五左衛門は自分の富がいつまでもつづくように祈りました。

そうして牛島の油石と浜のあいだは、むかしは海で、千石船がおとていましたが、五左衛門は、あの油石と浜とのあいだに草が生えるまでわがあとがさかえるように祈りました。ところが間もなくあのあいだはしゃって(埋まって)しまつて陸になり、五左衛門の身代はかたむいてきたということです。

五左衛門が貧乏になった話には、こんな話もあります。

五左衛門がある正月二日に、おのれの持つている船の数を数えようとなりました。ちょうど二

日は船の乗りぞめの日です。五左衛門は牛島の前から、大槌島のあたりへかけて船をならべさせました。山の頂上に立って一そう一そうと数えていきましたが、船があんまり多いので、まだ半分も数えないのに日が西の広島のみこうへ沈もうとしました。

五左衛門は金の扇をひらいて、

「しばらくもどつて下され」

と、目をまねきかえしました。すると島かげに入ろうとした日がまた少し上がってきました。そこで船の数をやっと数えることができましたが、お日さまと船霊(ふなだま)さまのいかりにより、五左衛門はたちまちのうちに貧乏してしまいました。

丸尾海賊(?)はいなかったが、民話のなかに生きていたのである。

牛島はちっぽけな島である。丸亀から「おい」と呼んだら声が届きそうな近くにある。海上二十分である。こんな島に平清盛まがい太陽を呼び戻そうとした大分限者が住んでいたのだろうか?

中国と四国を結ぶ陸橋の建設を、この塩飽七島をつなぐ地点に決定したことがあった。

さっそくNHKの高松支局からN氏がやってきて、

「あなたは牛島の丸尾五左衛門の子孫だそうですね。今回の陸橋決定を記念して塩飽特集を計画

しているから、感想を述べて下さる」と、言うのである。とたんに私は冷汗をかいたのである。それというのも最近、丸亀市に隣接する多度津町に住む丸尾重俊という人から手紙を受けとっていたのである。

「私は十一代目丸尾五左衛門重俊である。わが家の系図によると、先々代に高松の香西に分家した者がある。それがあなたの曾祖父である」

私はトタンに分家の端くれに転落したのである。十一代目のご本家が現存する限り、私などの出る幕ではない。大いに羞んで遠慮申し上げたが、「分家でもめかけの子でもいいじゃありませんか」と、強引に引っぱり出された。

「ひとつ、刀を抜いてるところを撮りましょう」

と言う。N氏もやっぱり塩飽の住民の子孫だから、海賊の血が流れていると思ったのに相違ない。

このテレビを見た作家の白川渥君から、

「キミが五左衛門の子孫とは知らなかった。

いつか塩飽の海賊を書くつもりだが……」

という手紙をもらったり、神戸の商船大学の岸井守一教授から、五左衛門の北前船に関する資料を知らせてもらったりした。

十一代目さんは国鉄の職員だったが、

「五左衛門を海賊だと思ってる人が多いので迷惑してますわ」

と、こぼしていた。

「海賊の方がロマンティックで面白いじゃないですか」

と、言ったら、「あんたまでそんなことを言ったら困ります」と、叱られてしまった。

だが、民話や伝説通りではないにしても、江戸期の日本の海運界に雄飛したというが、まことに謎の多い丸尾五左衛門である。

## はちはん

全日空機で高松まで飛んで、車で三十五分の丸亀港、そこで十一代目さんが待っていた。

「まず、本島へ渡って正覚院へ泊まります」

と言った。正覚院は本島随一の古寺で、そこには丸尾五左衛門寄進の山門と鐘楼がある。五左衛門の盛時を偲ぶよすがに、まずこれを見ようという次第らしい。

関西汽船の待合所で午後三時三十分の船を待つ。なんとなく侘びしい港である。ふと、待合所の看板を眺めていたら、変な文字が目に入った。ただ、「はちはん」と書かれている。

「はちはんは、お菓子の名ですよ」

「変な名ですな」

「いや、塩飽では、菓子の名に用いられるほど有名な言葉です」

と言った十一代目さんは、

「塩飽と高松藩が漁業権で争った時、幕府の判士十一人が塩飽の勝利を認めて連署していますが、その十一人のうち八人の署名の下に判が押してあります。その中に大岡越前の名もあります。ところが残りの三人は署名だけで判が押してない。しかし八人が判を押したのだから、それでいいじゃないか、気にかけないで堂々とおやりなさい——という意味なんです。八人の判ではちはんというわけです。これが方言になりました。まだ判のとれない三人に、いささか不安が残るが、構うことない、おやりなさい、というニュアンスがあります……」

なかなか面白い方言だと感心した。凶太くて、セツカチで、ままよなんとかなるさ、という気持ちで籠っている。

汽船は左手に絵のように美しく横たわっている牛島を黙殺して、本島に着いた。白衣を着た長身の僧が、棧橋で手を振っていた。正覚院の院元、三好祥光師だった。

正覚院は二百メートルの山の中腹にある。道は峻しく細く、くねくねと曲っている。それを矢のような速さで、院元が運転する小型自動車はのぼってゆく。大変な腕前である。十センチ運転

を誤ったら大木に衝突する。些かハラハラする。

「なアに、馴れますから、目をつぶっていても大丈夫です」と言う。

目をつぶられては困るから、大いに話しかけて、ご機嫌を取り結ぶ。院元の話によると、本島もすっかりさびれて、過疎の島になりつつあるらしい。中学校もいまに丸亀へ通わねばならなくなりそうですよと、心細い話だった。

美しい風光と、海賊島という好奇心、丸尾五左衛門の伝説と海水浴で観光地として生きてゆくより他に手はないという結論だった。

「だが、今度のNHKの勝海舟が当れば、咸臨丸でアメリカへ渡った水夫はほとんど塩飽の出身だし、当時の珍しいローソク・ランプや日本で最初の写真も残っているのだから、きっとまた有名になりますよ、それが頼みです」

正覚院は立派な寺だった。

観光客や、若い修行者が泊まるので、立派な宿坊もあった。

山門は江戸期のものに違いないが、古雅でどっしりとした落ち着きをもっていた。短い石段から見上げた屋根は、少しの銜はいもなく、親しさが滲み出ている。しかし左右二体の仁王像はあまりにも常識的で義理にも傑はれているとはいえなかった。鐘楼は近江の三井寺と足利の鑊が阿寺なのとを混合したように地味で、清楚だった。五左衛門が寄進したものとすれば、あまり悪い趣味では

ない。成金臭など感じられない山門と鐘楼だった。

「面白いものがあります。これは五左衛門家と当寺とが浅からぬ関係にあったことを物語るものですが……」

院元さんはさらに観音堂を案内して、

「さあ、床下を覗いてごらん」

と言うのである。薄暗く、ぶんと湿った匂いのする床下は、複雑に入り組んだ木々の組み合せだった。

「よくごらん下さい。奥の大きな板は千石船のカジですよ。床下はすべて丸尾家の千石船の材をそのまま使ったものです」

なるほど、そう言われると、普通の床下ではない。大きい船のカジや船板や帆柱が、そのままの形で残っているようだ。

「ひどい世の中になりましたな。仏像泥棒が流行しましてね。あ、そうだ。牛島の極楽寺のご本尊も盗まれて、いまだに行方が知れぬそうです。だから当院では、鉄筋の宝蔵をつくって厳重に宝物は保管しています」

と、院主さんは説明してくれた。牛島の極楽寺は長徳院ともいって、いわば丸尾五左衛門家の菩提寺である。だが現在は無住で荒れるに任せてある。だからご本尊も盗まれてしまったらしい。

十一代目さんは目を伏せて、口のなかで呟くように「丸尾家に力がないけに申し訳のないことです」と言った。

記録によると、長徳院には一切経六千九百三十巻があり、その経蔵もあり、その他多くの宝篋印塔を初め、石灯籠、絵馬などが残されていることになっている。

さて、五左衛門、五左衛門というが、果して讃岐の民話に残されたような興味ある話が、歴史的に実在したのだろうか？

塩飽の歴史では真木信夫翁が最高の権威である。親切な院元さんの車に送られて、八十幾歳の翁を訪れたのである。

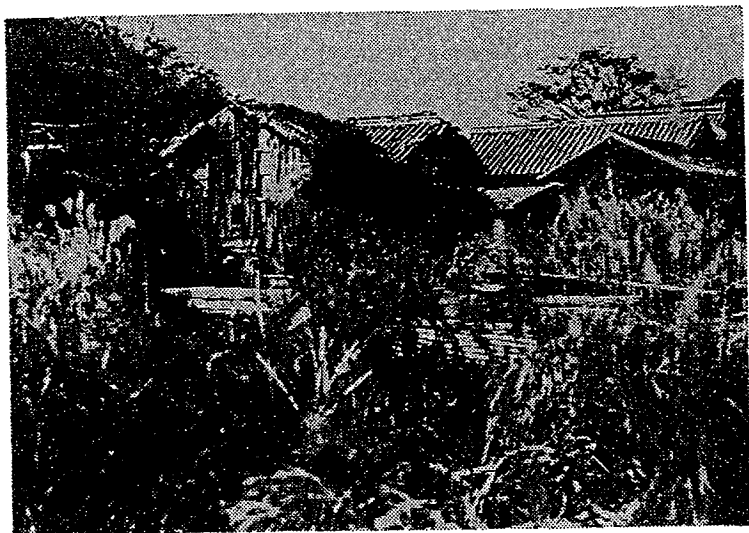
翁の著書には丸尾五左衛門に関して、

「五左衛門は牛島の人である。瀬戸内海の大船主、島嶼の霸王といわれ、ほとんど徳川全期にわたって海運上の利権を握り、巨万の富を積んで、城郭の如き邸宅を構えた」

と、ある。最もカンタンで要を得た五左衛門観である。やっぱり、五左衛門は海賊ではなかったようだ。また、

「代々五左衛門を称して広くその名を轟かした。最も全盛を極めたのは寛文十二年北廻航路の開始後、元禄年間の頃であった。一時は日本全国の到るところの港湾に、五左衛門の船影を見ざる事なき有様であった」(「塩飽海賊史」)





廃墟と化した五左衛門の屋敷跡

牛島に永住を決意して、海運業を創めたことになっている。翁は現在もその説のようである。さあ、そうなると「讃岐民話」とはだいぶ話が違ってくる。民話では五左衛門は牛島生まれの若く貧しい水夫の下っ端になっているが、真木説では、立派な武士で、肥後からやって来たことになっている。牛島生まれの貧しい水夫なら、まだ「海賊の末裔」の可能性はあるが、肥後の武士では、いよいよ海賊とは縁がなさそうである。

翌日、牛島へ渡ったが、海上十五分である。ただ流れが早く急な瀬戸をへだてている。小さな棧橋には人影もなく、荒涼としていた。

海岸にも家は建っている。だが、住む人はなく、壁は落ち、屋根は傾いている。廃墟へ足を踏み入れたような感じである。

ただ、屋敷跡の基石が昔の栄華を語るように、

真木翁は広くて古雅でよく整頓された座敷に端座していられた。世話をしておられる娘さんが「近頃、耳が遠くなりまして……」と言われた。だから、大きな声で話して下さいという意味がかった。

「二代目の五左衛門が偉かったらしいな」

と、翁はぼつんと言って、

「あなたの長頭という名は、初代から出ている。初代は長雲と号した。戒名も長雲だ。あなたの家系には、長の字がつく名が多かったハズだ」

そう言われると、私の祖父は長平といて、大阪で海運業を営んでいた。そして、私の三人の弟は、長喜代、長英、長正と、みな「長」がついた。

「十一代目さんは重俊といわれますな。それは二代目五左衛門重次から出ている」

そんなものかと感心した。

「五左衛門の祖先については、諸説があつてわからないのだが、肥後の武士だったというのが正しいようですな」

例の「塩飽海賊史」には「五左衛門は肥後の加藤家を浪人して上方へ登る途中、凶らずも牛島沖に仮泊せしに、この島が対岸の本島に近く、海岸深くして天然の良港をなし、瀬戸内海交通の関門にありて、地理有利なる」ことに目をつけ、また風光の美しさに魅せられて去り難く、遂に

畑の中にごろごろと転がっていた。このあたりは県の史跡に指定されている。  
 「あれが五左衛門の釘倉跡ですけに」——と、十一代目さんが指さすあたりも崩れ落ちて、いまは畑になっている。その隣も、その隣も、壁の破れた廃屋だった。ぞっとするほど荒れ果てていた。

「年々、この島から人はいなくなりませす」

だが、畑には一人の老婆が黙々と花に水を注いでいた。一握りほどの花畑だった。

「仏様にお供えする花をつくっております」

と、老婆は言った。十一代目さんとも昵懇らしく丁寧にあいさつをしていたが、

「登記は終らしたかい？ 早く片づけなさらんとな」

と、言った。十一代目さんの土地のことらしかった。

目の前は海だった。土地が毎年低くなって十一代目さんが子供の頃は六段もあった石の階段が、いまは二段を残して海に没入してしまってるそうだ。

私はフト民話を思い出した。油石と陸との間がつながって草が茂るまでわが家が栄えますようにと、五左衛門が祈ったら、神さまはまことに律気だったらしく、まず間もなく油石まで陸続きにして、草を茂らせた。それで丸尾家は没落し始めたことになっているが、現在では反対の現象が起こり、油石とはどこかわからないが、だんだんに陸地が後退し始めているらしい。

「ヨット・ハーバーにしたら理想地の地形だが……」

と、私は思った。牛島の、こことは反対側の山を越したところに膨大なレジャー・ランド建設が計画されているそうである。やがてまた過疎の島に繁栄が戻ってくるのかも知れない。

長徳院極楽寺は、海岸からすぐ近くにあった。さすがに人の住む気配が感じられる家並みがあった。

だが、長徳院極楽寺の名のみの山門は閉ざされ、扉も破れていた。軽く押すとすぐ扉は開いて、右手に、これは普通の小ぶりの鐘楼があり、形のいい小型の釣鐘があった。

「これは鳴らずの鐘と呼ばれて、この鐘を撞く者には極楽がやってくるが、その後には必ず地獄がやってくる」と言い伝えがあり、だれも恐れて撞く者がなかった。ところが五左衛門はこの島に着くと、いきなりこの鐘を撞いてしまった。不気味な鐘の音色はいんいんと響きわたって、島人は震え上ったということである。それがために五左衛門はこの世の極楽と思われる繁栄を得たが、間もなく地獄の没落を味わわねばならなかったのだという次第である。しかし十一代目さんはさすがに近代人だから、そんな迷信に煩わされない。いきなりポーン、ポーンと鐘を撞いて、  
 「あまりいい音色じゃありませんな。いんいんなんて凄いいものじゃない。むしろ陽気で明るい音色ですよね」

と言った。そして、言い伝えなんて、後から付会したものと断言した。

き出した。

「墓を守って頂いている宮本さんです」

と、十一代目は紹介してくれたが、私など眼中にないといった態度で、  
「経蔵こそ、しっかり守らねばな」

と言って、また、すたすたと姿を消してしまった。不思議な人物である。

急な裏山を少し登ると、海が見える丘に、丸尾家代々の墓がずらりと並んでいた。みな相当大きな五輪である。これは少々意味があるように思われる。本島にも巨大な人名の墓があるが、五輪ではない。代々五輪の墓を建てたのは「わが家は武士の出である」という意識の表現だったように思われる。

奇妙なことに初代五左衛門の墓は小さい。しかもこれだけは五輪塔ではない。

「清月長雲」と刻まれているが、墓が小さいことは、まだ家運が繁栄していなかったからだといふ推測も成立する。歿年は承応三年（一六五四年）三月二十一日である。それに較べて二代目五左衛門「華屋宗蓮」の五輪塔は堂々と一番大きい。元禄七年甲戌三月二日が歿年である。その隣に二代目の内室「固室性賢」の五輪がある。宝永六年の歿である。

「この夫人が偉かったです」

と、十一代目さんは目を輝かして言った。



歴代五左衛門墓の一部（全部で八基ある）

謎の宝篋印塔と極楽寺の一部

「丸尾家が衰運を招いたのには、それだけの理由がありました」とも言った。

左手へ階段を登ると観音堂があり、ここに盗難にあつた平安末期の十一面観世音像が安置されていたハズである。その堂の前に見事な宝篋印塔があつた。寄進者は、丸尾重栄だった。実は重栄は墓もなく、謎の人物である。

寛延三庚午歳十一月吉辰とあり、

「若在有情能於此塔一番一華」

の偈が刻んであつた。

さらに進むと経蔵があつて、ここに問題の一切経六千九百余巻が納めてある。

そのとき、全く風のように労働着に戦時中の国民帽を冠つた中年の男性が現われた。どうして私たちがここにいるのを知つたのだろうか、不思議である。そして私たちの先きに立って歩

三代目重正、四代目正次と、以下夫人の墓もまじえて八基の五輪が並んでいた。一

### 丸にやの字があったか

十一代目重俊さんの宅は多度津町堀江にある。ゆかりの香川霞氏や村井照雄氏が集まって詮議が始まった。まず十一代目さんは熊本郷土史家・下田一喜氏に依頼して先祖調べをしてもらった返書を披露した。要約すると、

「肥後の阿蘇家は古い家柄であり、天正の頃、その重臣に東掃部介というのがあった。その阿蘇家が亡びて加藤清正の時代となるが、東家はこれに仕えている。次の加藤右馬之介時代に東勝右衛門という五人扶持の武士があった。それが浪人している……」

そこで十一代目さんは推理するのである。

「その東勝右衛門が、不遇な武士に愛想をつかして浪人をし、牛島に来て初代五左衛門になったに違いありません。丸尾家は肥後の東家の出です。その証拠に、二代目重次の末子に東家を継がせて東伝七を名乗らせています」

これでは海賊の末裔とはますます遠ざかってゆくようだが、民話と比較して考えるとどうだろうか？五人扶持の下っ端侍なら、牛島が気に入ったからと上陸しても、いきなり回船問屋をやる

わけにはゆかなかつたらどう。

極楽寺の鳴らずの鐘を撞いたのも、たとえ地獄に落ちようと、一時の栄華を願うほどのヤケツパチの心境だったに違いない。

民話のように若いかしきではなかったかも知れぬが、とにかく大阪通いの船頭もやり、芥舟を押し苦勞したかも知れない。熱病神のおかげで金を儲ける話は、落語にも類似話があるくらいだから、これを五左衛門独自の伝説民話とはいいい切れぬが、熱病神を退散させた相手をハッキリ大阪の大富豪鴻池善右衛門と断定している民話もあるから、初代五左衛門はそのあたりとも交渉をもって、おそらく回船問屋の基礎を築く地味な苦勞をした男で、小さな墓の下に眠る結果となつたのだろう。

「五左衛門民話」では、実は一人の五左衛門が活躍することになっているが、海運王といわれたのは三人以上の五左衛門が分担しているのだと断定すべきである。

では、繁栄を極めたのは誰かといえば、まず二代目重次に始まる。彼は元禄七年（一六九四年）に六十九歳で亡くなるまで実に四十年間、良妻の内助の功もあって、回船業を営み、北は北海道、奥州、南は九州まで、幕府の官米や諸大名の城米を運んでいる。延宝七年（一六七九年）八月に、船入りといって船の修理をした石数の統計が残っている。

二代目五左衛門の持船の修理は――

一万一千百三十石

で、他を断然引き離している。まず二代目重次が全盛期を迎え、歴代五左衛門の代表者といってもいいだろう。

三代目重正の元禄十六年（一七〇三年）の持船の修理は、  
一万一千二百石

と、まずは先代を少しばかりだが凌駕していて目出たい。しかし三代目は三十八歳の若さで死亡している。宝永五年（一七〇八年）四月二十六日のことである。大変な若死にだが、さらに奇妙なことは、母親の重次夫人が同じ日に亡くなっていることである。賢夫人の誉高い女性だったから、親子心中などは考えられない。伝染病だったのかも知れない。重正の戒名は直至智航である。

四代目正次については同種の記録はないが、面白い証拠が残っている。肥後の細川家に貸しつけた調達金の借用証書である。

宝永元年十月に 銀三十七貫三百匁

宝永三年九月に 銀五十貫

この二つは三代目の時代だが、

宝永七年九月に 銀八十五貫三百匁

享保五年十二月 銀五十一貫三百匁

これは四代目正次の時代である。大名にこれだけの金を貸せたのだから、四代目もまた隆盛期にあったと思わねばならない。

丸亀市発行の「丸亀の文化財」にも、

「牛島船持衆の長老として豪華をうたわれた全盛期は、寛文から宝暦にかけての重次、重正、正次の三代、約百年間」の栄華だった旨が明記されている。正しい判断と思われる。

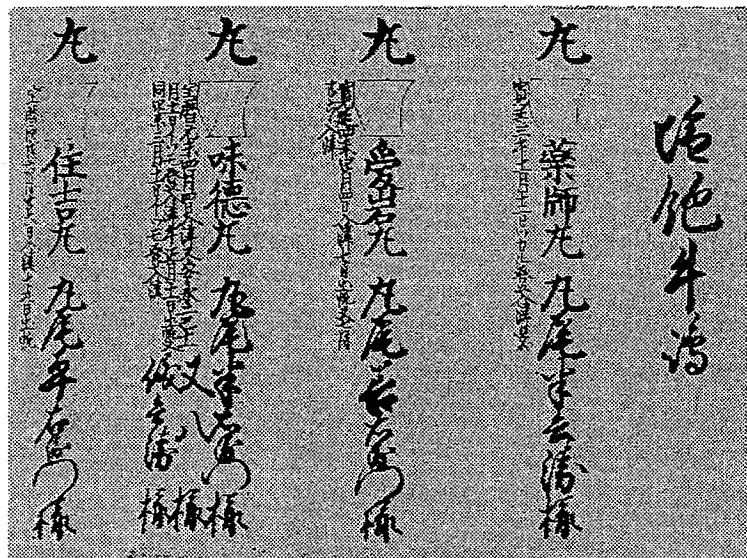
四代目正次は宝暦六年（一七五六年）四月二十九日に逝去している。六十五歳だった。

こうなると、油石に草が茂るまで栄えよと祈ったのは、二代目重次らしく思われるし、金扇をあげて太陽を呼び戻した伝説の主は、重正か正次らしく思えるのである。

確かに五代目応蔵の代に入って、衰運が起きている。今も、四代目正次の位牌が十一代目家に現存しているが、それには四代目の戒名寿昌院蓮沢宗因と刻まれ、裏に施主五左衛門応蔵の名はあるが、五代目はここに名を留めるだけで、墓もなければ戒名も不明である。歿年も享年もいっさい判明しない。これは没落が始まったことを端的に示している。

没落の原因にはいろいろの説がある。

いい気になって細川などの大名に金を貸して、これがすべてコゲ付きになったからだとか、持船が遭難したせいだとかいわれている。多分それらのすべてだろう。



船宿帳。船名の下は船頭の名。(岸井守一教授撮影)

また、毎年正月二日に持船が全部牛島の沖に集合して、ここから新しい年の仕事に出発する習慣だったが、この日、大暴風となり、持船の大半が一挙に失われたという説が有力である。この話が、金扇で太陽を呼び戻す民話に変形したと見るのが妥当だろう。

これは四代目から五代目の頃ということになる。民話もその底に事実を秘めている。六代目は没落して今更五左衛門を名乗る気がしなかったのか、喜平次久隆の通称で通し、文政元年（一八一八年）七月二十七日に六十四歳で歿している。清涼院本覚嶋翁居士である。

七代目五左衛門以降は、英照院智光以居士天保六年（一八三五年）三月二十四日歿、六十歳だった。没落の姿を見るに見かねた船頭たちが、細川家に対して「乍恐奉願口上書」を差し出し、貸金の返済を懇願した古文書が残っている。合計銀高貳百貳十三貫九百匁の請求である。日付は文政五年十一月、つまり七代目の時代である。だが細川家はノーコメント、一文の返済もなかったのである。

このあたりがどん底の感じで、八代目になるとまた、歿年も、戒名も不明である。五左衛門致隆と称した。細川家は一文の金も返さなかったが、領主自ら参勤交代の途で牛島にお忍びで寄り詫びを申し述べている。相手は大名だから、金を返してくれなくとも、小さな「お成り門」を作って迎えたが、その門が今も朽ちて残っている。この門を島人は「お詫び門」と呼んでいる。九代目はまた七郎右衛門のまままで通したスネ者だったが、かなり繁栄して、千両箱を抱えて琴

平の紅灯の巷に酔い痴れたと伝えられる。そのためか、歿年は不詳だが、かなりの若死にだった。明治十二年（一八七九年）三月十七日に死亡、親蓮院覚実心徳居士。

十代目五左衛門俊次が十三歳で家督を継いでいるから、先代の若死にが推測される。十代目は昭和七年（一九三二年）九月三十日の歿で享年六十五歳、慈泉院覚法浄往居士——そして現在の十一代目重俊さんに至っている。

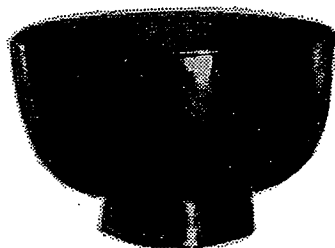
本家に伝わる系図、位牌、古文書の類を懸命に整理してやっとこれだけが判明した次第だ。本家にはもう一つ奇妙なものが残っている。古びた黒塗りの吸物椀である。

民話にもあったように、五左衛門の繁栄を伝える歌が残って、今も歌われる。

沖を走るは 丸尾の船か

——と、あったが、この手紙の中で、五左衛門がなぜ小さい牛島に根拠をおいたのだろうかという疑問は、本島と牛島をぐるっと回ってみればカンタンに解明されるところで、なるほど本島は大きい、どこにも千石船を発着させる良港がない。牛島は小さいが周囲の海が深く、適当な海流もあり、海運業の根拠地としての条件をもっていたと思われる。また、持船の修理表では第

過日(四十九年十一月)、NHKのローカル放送に「塩飽海運史」がとり上げられ、五左衛門が、なぜ広い本島によらず、小さな牛島を本拠としたのかわからない、と疑問を提出していました。その折、五左衛門が海の守護神である金刀比羅に奉納した銅の吊り灯籠が映されましたので、さっそく同社務所で調べてまいりました。また善通寺本山にも詣り、寛政時代の五左衛門が寄進した花瓶を確認してきました。これは唐との貿易で入手したもので、約八百年前の宋の砧青磁の優れたものだとのことでした。また金刀比羅宮寄進の吊り灯籠の連名の中に、笠島、與島、西山(?)に住む丸尾家一門の名がたくさんあることから推察して、刻明に調査したら、一族の子孫がこの島々に残っているのではないかと存じます。まだ、五代目五左衛門応藏の戒名も事跡もわかりません。また、丸尾家の持船の船名が少しでもわかれば、牛島、本島を調べ、菩提寺の古文書を調査しても判明しません。全くわからぬことが多く困っています。



丸尾家本家に伝わるお椀

丸にやの字の 帆が見える

この歌に対してクレームをつけたのは、尊敬する神戸商船大学の教授岸井守一先生である。

先生は日本全国の港の船宿の宿帳を調査され、丸尾家の持船の帆は、すべて白帆であったことを確認された。そして宿帳の写真を送って下さった。

「帆に屋号などを書くことはあり得ないのが常道だった」

と、先生は言う。そうすると「丸にやの字の帆が見える」の民謡はウソになる。

だが、本家に残るその古い黒塗りの椀には、丸尾家の千石船の図があり、その帆には明らかに丸にやの字が書いてある。こうなるとどちらがほんとうか判らなくなる。しかし民謡が有名になったから、後代出来の椀に、空ごとながら丸にやの字を書きこんだとも考えられぬこともない。海運王五左衛門の調査は甚だ末詳の部分が多い。まあ「はちはん」で押し通すよりほかはない。

#### 後記

その後、丸尾重俊氏から手紙がたびたび来た。その一つに――

二位だった長喜屋吉之助、第三位だった長喜屋伝助も、同じように牛島を根拠地にしていたのだから、丸尾五左衛門が牛島を選んだのは当然だった。宋の青磁の花瓶を善通寺に奉納したのは、寛文時代といわれ、また、当然、それは丸尾家の最盛期でなければならぬから、二代目五左衛門重次、三代目重正、四代目正次のうちの誰かということになる。善通寺の伝承を信じて寛文年間（一六六一—一六七二年）ということになれば、二代目重次の寄進と考えるのが正しいようだ。初代五左衛門長雲は、承応三年（一六五四年）に死んでいるのだから、これは考えられない。また持船の船名をいろいろ調査しているが、少しも手がかりがない由だが、これは全部の船名を知るのは不可能としても、たとえ少しでもというならば、例えば神戸の商船大学の岸井守一教授のように、全国各地の船宿に残る船宿帳を調べること一つの方法である。同教授が私に送って下さった船宿帳の写真だけでも、薬師丸、愛宕（岩？）丸、味徳丸、住吉丸の名が記帳されている。元禄十六年四月の丸尾家持船の修理は一万一千二百石で、その内訳は千百五十石船をトップに三百二十石船を入れて計十三隻である。持船の何割がドッグ入りするのかわからないが、一割が修理しているものと仮定すれば、 $13 \times 10$ だから、大小の船取り混じえて百三十隻の持船があったことになる。その倍としても二百六十隻である。だから、牛島から大槌島までずーっと船を並べたが数えきれなかったという伝説は、少々誇張のように思われる。

